

(<http://www2.bbweb-arena.com/naka602>)

1. 授業づくりは、教師の原点。

- ・子どもは授業で必ず変わる、子どもは授業で育てるもの。
- ・学級がうまくいかないから、研究授業が出来ないのでなく、うまくいかないからこそ研究授業をするのである。この二つは両輪である。
- ・授業づくりを通して学級をつくり、学級づくりを通して授業をつくる。それが子どもの成長、教師の成長。
- ・授業の下手な先生はだめ！でも努力すれば、授業は必ずうまくなる。だからがんばるのだ。

2. 研究授業は、すればするほど力がつく。

- ・研究授業をしないと、いつまでたっても授業はうまにならない。
- ・研究授業をすると、必ず「授業」を、「子ども」を、見直すきっかけになる。
- ・授業がうまくなると、子ども理解が深まり、学級づくりもうまくなる
- ・授業研究はしんどいけど、楽しいもの。

3. 指導案を書くと、必ず変わる。

- ・指導案がうまく書けるようになったら、一人前。
- ・指導案が適当でも授業のうまい先生はいる。でもそれでは成長はない。自分の素質だけでは必ず限界がある。
- ・子どものことも、教材のことも、指導のことも、わかっているようで、実はわかっていない。書き出すと書けないことが多い。だから書くことが大切。
- ・指導案を書くと、自分の授業が見えてくる。クラスの様子が見えてくる。
教師自身を見直す、子どもを見直す、授業を見直すために指導案を書くのである。
- ・年に1回か2回のこと、その時ぐらひはたっぷり時間をかけてしっかり書きたい。

4. こんな子どもだから、こんな教材を使って、こんなふうに指導する。これが指導案。

- ・児童観、教材観、指導観が一本の筋でつながっているように書く。
- ・子どもの実態は全体的に書くのではなく、あの子この子のことを具体的に書く。
- ・全体的に見ているのは、実は誰も見ていないのと同じこと。
- ・個を見るからこそ、そこから全体が見えてくるのである。
- ・誰の顔を思い浮かべながら授業を考えているのか？その顔をはっきりさせたい。
- ・個人カルテ（座席表）を書くと、誰を見ていないか、すぐにわかる。
- ・指導案には具体がたくさん出ている方が、授業はうまくいく。

5. 東井義雄「ほんものはつづく。つづけるとほんものになる」